



後樂園拜見記

3391





門十  
3391  
巻

後樂園拝見記



御代年号此名を天保九年といふなり

五月のちつ廿六日のむゆ日のち目子小石川此御

館此清島山をみよ仰とのおろとあり

くれど未だ時許をのり久米彦助西

野新治間宮一郎をかもたひて

御死を内ふ入る柴田源助中村彦

小

高田早苗



三郎、待あちとるそ、取嚮導ニをり宮チのあ  
久も時あそ、塔をり、塔いみふ道、このふ  
雨時暑塔すふも、塔をり、塔中、塔たの  
り、塔心ちとるそ、塔後樂園を趙  
宋の范仲淹ノ士、塔當先天下之憂而  
憂、塔後天下之樂而樂、塔と云る語、塔不  
らるそ、塔朱舜水ノの、塔らむ、塔をり、塔法

庭山スナ北總ナ名ナちるそとぞ

天タ下ノの樂タふらそ、タおられ、タ心  
た、タみ、タそ、タ北タ中タふ、タ有タら、タ西行堂、  
北、タわ、タ理、タり、タ駐歩泉、タあり、タ道、タは、  
ふ、タ清水、タなる、タと、タ云、タる、タ歌、タの、タ文、タ多  
左了、左これ堂を、左ぞ、左團瓢亭と、左云、左と  
た、左ん、左大、左なる、左池、左は、左づ、左な、左行、左ハ、左涵、左徳、左亭



大内記信篤が記す、黄門水戸  
源威公所創建也、寛永年中  
將軍家遊覽於此、與公同樂  
山影水色、森樹清波、交集平挹  
于一堂中、因書一語、台位降  
祥涵德揚、光懿親累、垂继美傳  
芳月清雲、白鳥轉花香、靈德惟

靈德惟大、山高水長、とみぬ大櫃  
河、西湖、提ちど、作眼の下、下  
あり、奥おくらまゝて、清キヨ水ミヅが籠乃  
多タきつる、路於オちある、在えもい、息ここの亭  
子コふい、賜ほご、御懐紙をたまたまに  
そと

子と本とおか、緑ふ茂り



舎へ小き松を多きくとも起く  
と遊ぐをる御墨はまふ御筆の  
ふあはせききしていと多げまゝおん志  
りとなまごころの松の舎の馬をふ  
めてあそびけしる人とおがめきな  
はくくうごんなくあそび阿内なるお  
おそやごそ法返しな

舎

推屋

汗

幸

子木もおちみどまり  
げものれ海まめぐみれ露をたれ  
美そとあそぶ希り書きたる  
まななるけしやわらま飯をたが  
て清水に親音堂ふままづ舞  
臺ら里谷をみおらまふ免久  
めあそえそんがなま通天橋

行 悟

眩

暁

か



このたつとれなるふ楓樹カハゲ生志々る里都都なる  
まゝ件おぢええそ相似ひゞもみぢ歟れをみたる  
まゝ秋このぼぞひるまぢ紅さ言し得仁堂節の  
く伯夷叔齊の像あり奥深久分り  
道のねど久米博高のくまう紙り  
書法をくまをまゐるやまゐ

このくちくもわくそみ國此なる

木立志げまめ久米をあふ久々りのか  
八卦堂を西山贈大納言殿様ひ  
くちくおけし、ほし

大猷院殿様より御ゆる拜領りて理の文  
昌星を安置しなまひ堂に軒り  
八卦乃のまゝ子押ハを寄まへ社に八卦  
堂とはらへりたとふも今イヒド合殿ハ金



毘羅權現を勧請せし里渡月橋を  
朱舜水漢の里に流るるに法造あり  
中字祓比駒橋某ふお海命を作はく  
瑞高なるの字みやうに石橋を理  
又此名を園月橋とて影いふを  
水あり映に社を園なる月秋は  
地ふみゆ映れがたふ里け里間宮井秋苦影の

よめ流し

水下をこれのげを合下る園下の南る  
月疑に疑がめく此に社石は山橋石複道を  
過て高疑ま岡此ふ社石を喜晴亭とて  
近比き作この流るる出比き亭作子取  
里前廣を野ひら野けら野ふそ萩薄女郎花  
な廣むやう野秋草今野ふ咲出ぬ野庭野ま



志城の岡牛込  
乃岡を打こして西に空をさすのふ  
富士に祢まの雲は色にま  
たみみやらに多る山を助むの薬  
頂に宮都ふ之院に深るを繪ふ御道  
まごの程江島に岩本坊ふ志清一御  
ちを少づめをまをくするを志の  
煙止

祢に雲ふの久祢多るをみやらを繪は  
あがに祢のな祢のあらぬの白妙  
此雲間の雲に色をたふるとある  
をまし事とおもひ出らまぬ一ぼく  
やまらふむごと薄茶寒具をたまを助  
を理折ふく空をれ初をあらま亭の  
名に喜晴れもどふあはのたふるも







其れよりやがどあり行ふ新水大池乃  
其 船も中島を渡る  
石れきりむら木立れあやうきまへり  
いづのふりいづる辨財天女の叢  
祠ありまたは石橋阿曇天台山の  
志やげりしりやうむわたり  
まへりもわたり船あり  
橋 石 此 有 渡 難

物もて磯路をばはしゆり新瀧  
つる大瀧ありをわたりしりやうむわたり  
石もをたふらむわたり

此のりるえん久みふあふぞまへり  
徳亭此前を徑て  
まへり  
御唐門を



して外の社を辭水後樂園と題社  
多る扁額をのけ給へ里<sup>此</sup>も貞芳館  
水清まへ庭ふて 君も常ふ心でおそ  
志まきて御<sup>垣</sup>の<sup>内</sup>はち社を<sup>殊</sup>はらふ<sup>更</sup>の志  
古<sup>候</sup>は<sup>仰</sup>志みてあふま見<sup>思</sup>なる池は  
中白鳥鶴こと<sup>思</sup>望<sup>思</sup>起<sup>思</sup>久<sup>思</sup>深<sup>思</sup>ま<sup>思</sup>お<sup>思</sup>む<sup>思</sup>め<sup>思</sup>久  
み<sup>カギ</sup>不<sup>カギ</sup>浴<sup>カギ</sup>—あ<sup>カギ</sup>へ<sup>カギ</sup>も

宗はきみは世のうき<sup>思</sup>の<sup>思</sup>ち<sup>思</sup>と<sup>思</sup>も<sup>思</sup>志<sup>思</sup>ら<sup>思</sup>鳥  
れ<sup>思</sup>心<sup>思</sup>を<sup>思</sup>た<sup>思</sup>く<sup>思</sup>く<sup>思</sup>あ<sup>思</sup>る<sup>思</sup>ふ<sup>思</sup>池<sup>思</sup>水<sup>思</sup>去<sup>思</sup>年<sup>思</sup>は  
文<sup>思</sup>月<sup>思</sup>は<sup>思</sup>花<sup>思</sup>地<sup>思</sup>の<sup>思</sup>夜<sup>思</sup>古<sup>思</sup>は<sup>思</sup>御<sup>思</sup>館<sup>思</sup>ふ<sup>思</sup>人<sup>思</sup>—<sup>思</sup>は  
ぞ<sup>思</sup>く<sup>思</sup>多<sup>思</sup>ま<sup>思</sup>ひ<sup>思</sup>そ<sup>思</sup>詩<sup>思</sup>歌<sup>思</sup>は<sup>思</sup>會<sup>思</sup>も<sup>思</sup>を<sup>思</sup>ま<sup>思</sup>を<sup>思</sup>給<sup>思</sup>  
つ<sup>思</sup>も<sup>思</sup>を<sup>思</sup>ら<sup>思</sup>さ<sup>思</sup>た<sup>思</sup>ふ<sup>思</sup>あ<sup>思</sup>の<sup>思</sup>—<sup>思</sup>も<sup>思</sup>御<sup>思</sup>ま<sup>思</sup>へ<sup>思</sup>近<sup>思</sup>久<sup>思</sup>あ<sup>思</sup>—<sup>思</sup>  
出<sup>思</sup>ら<sup>思</sup>社<sup>思</sup>中<sup>思</sup>元<sup>思</sup>賞<sup>思</sup>月<sup>思</sup>と<sup>思</sup>い<sup>思</sup>希<sup>思</sup>題<sup>思</sup>を<sup>思</sup>—<sup>思</sup>ま<sup>思</sup>を<sup>思</sup>あ  
そ



のきを初らそおれくめはるたのれも

初<sup>初</sup>あまればよのもちれ月うげま、新

秋夜雨とひあをほがらええ

おがらるまうーはまがれをれもれ

改<sup>改</sup>うそ雨ふ成ぬる秋生れはうーそ

君れ中元賞月れ御祝

まごのちる今宵れのげれまよるれが

久理のそく見む文月の月たご<sup>此</sup>古を

のれおほ<sup>彼</sup>うそー<sup>年</sup>ちるぶいあとおも

出られそ中くふ池れ心と理も<sup>此</sup>まらう

ふの久たまむ<sup>浮</sup>はるを丘<sup>上</sup>れそり<sup>作</sup>れれ

牛込市谷ちごの御門目<sup>路</sup>ち<sup>道</sup>はるのり

み<sup>見</sup>とふ<sup>通</sup>されふ石川のたごれの音<sup>音</sup>あ

も<sup>下</sup>とち<sup>通</sup>のそくま<sup>可</sup>え<sup>賞</sup>る<sup>可</sup>少<sup>可</sup>る<sup>賞</sup>て<sup>可</sup>ふ<sup>可</sup>を<sup>可</sup>の



やらの久きるほご申打下る比ふれちあて  
目と西折山のちふう次つ久げまのちあふ  
社ぞんふあう社そまごぞぬ  
新めが中絶つるもふけるるあ  
やう古起君のふる折志ま山

天保九年五月竹醉日賜後樂  
園中之四方竹廼賦而奉呈長

歌并短歌

たらめらるる神神尊の敷あきるやま  
此國を物さるふちり出る國なる  
此社ともめらるる國をのうふ御比津の  
くちあ久方折日能る國あの新たきて



日あるる國をこゝへし三北三韓から久し  
くぬ久ぶきたま志らぬ國づ内代を三韓を  
千舟も舟と檣をカチほりひまをたふ久  
きそまぶきた物らおほくを干其の考ちみん  
くらず其名を奉まはるるぬ免づ  
志まゆらる竹を方以の世ふ生る出ん  
むのけま久もあやふの志ちまゆと起さるる

松竹位の初初言之名の君は紫えまゆらみ  
ちの寺寺ま小石川べの御園生ふ志がを  
まするを竹竹を根こふちサツキ五月  
竹の志ふ日あ字をよる久下を  
たまつれをまやぬる神田川べの松などの  
菴イノ植内イノふう志おほく大切ひまの由まを  
志の葉れ其げ如を盤ひまを志の色れ不易のけ



らびやまことあーきふあき君を以ては夕祝

あま年をこのおそちを久北外を思許

あまのほそ竹の宗新まあしを賜

あまそぞを教

あまのほそくまのあまをこー一村はけを告

あま竹をあまをあるあやま教

あまみ竹以てあまみそもあまのあま見

あまあまのあまの一村欲

坐

朝

産

許

多

所

思

賜

婚

時

教

告

告

孝教

賜

方

教

在

或

度

其

清

鏡

對見



門人 間宮三郎源升 芳謹書

小山田將曾平 敬啟



小山田將曹平與清上

門人岡三郎源升芳謹書



小山田將曹平與清上

門人閻呂郎源升芳謹書

落款



